

紹介

中世社會の研究

中村吉治著

近世初期農政史研究に關して、先に一書を著はされた著者は中世から近世への轉換期に研究の中心をおいてその社會經濟史の方面を開拓してゆかれる中に、中世後期に視野を擴げ、各種の農政史方面の論著を公にされた。本書はその諸篇を收輯されたもので

- 第一、中世の社會問題
- 第二、中世農民の反抗
- 第三、田地に神木を立てること
- 第四、水の分配
- 第五、地水分配
- 第六、中世農業勞働の一例
- 第七、近世初期に於ける勸農に就いて
- 第八、安土桃山時代と徳政
- 第九、初期加賀藩の田租に就いて

の九篇より成り立つが、何れも一度何等かの形式で發表されたものを多少修補して收められたものであるから一々の内容に就いて紹介する事を差し控へるが、就中第三の「田地に神木を立てること」

と、及び第四の「水の分配」は吾人の興味をもつて讀んだものであり、農政史研究がこの方面にまで觸れて行つた事を喜んだ記憶を新たにす。正に、水の問題、點札の問題の如き、案外重要な命題が農業史の方面に取り殘されて居つたもので、更に井ノ口の問題、溝の問題、堤の修築、虫害の豫防の如き今後採り上げられべき問題であらう。

たゞ本書の書名が内容と些か合致しない趣があるが、併し著者はその點に就いては、第一の「中世の社會問題」の項に於いて、著者の言はんとする中世社會を規定して居る所があるから、深く咎めるには足らないかとも思ふ。次の時代の我國史界を引受ける人であらう著者の精進を期待して已まぬ一人として、この紹介の言葉を喜んで執筆した。(河出書房發行、定價四、五〇)〔中村直勝〕

北方文化研究報告

北海道帝國大學北方文化研究室編

エレム鐘がひびきわたる新進の北海道には今なほアイヌが古い生活を保持しつゝ生きながらへてゐる。而も次第に消滅への道をたどりつゝある現狀に於いて、我が體質人類學徒、民族學者の間に彼等の研究の必要が高唱されるに至つたことは當然の事である。昭和十二年北海道帝國大學に北方文化研究室が附設されて、こゝに研究報告が續刊されることになつたのは中で最も注意せらるべきものゝ一つとしよう。而して今總長の發刊の辭に於ける「我が大學に於ても、其の末然の使命たる自然科學の研究に加ふるに、

人文科學的研究の端緒を見出すに至れるものと云ふべく、將來族々としてこの種有益なる研究を見るに至るべきは信じて疑はぬところである。此の事業の抱負を述べたもので、其の研究室に於ける主任上原轍三郎教授(慶)、犬飼哲夫教授(慶)、兒玉作左衛門教授(慶)、鷹部屋福平教授(上)、鈴木醇教授(理)等の陣容と相俟つて、必ずや學界の期待に副ふものがあらう。

さて既刊の第一・第二の兩冊に收められた研究は

アイヌの頭蓋骨に於ける人爲的損傷の研究 兒玉作左衛門

アイヌの木皮舟 犬飼 哲夫

アイヌ屋根の研究と其構造原基體に就て 鷹部屋福平

近世に於ける樺太を中心とした日滿交易 高倉 新一郎

北海道開拓初期に於ける土地制度 上原 轍三郎

以上第一輯

アイヌ住居の研究 鷹部屋福平

アイヌの文身の研究 兒玉作左衛門

イオマンテの文化的意義とその形式(一) 伊藤 昌一

我國に於ける樺太地圖製作史 名取 哲夫

高倉 新一郎

柴田 定吉

以上第二輯

であつて、其の對象は主としてアイヌに向けられてゐる。以下簡単に内容を瞥見しよう。第一の兒玉教授の文は八雲・長萬部部落・浦幌・樺太・森・北千島(古守)で發掘せられたアイヌ頭蓋骨に就いてそれに施された人爲的損傷の調査の結果を述べたもので、こ

れも埋葬内容攪亂の關係、性別及び年齢、施術器具、方法、目的等に就いて、夫々吟味した後、其の約三〇%がかゝる損傷を——多くは大後頭孔に——受けてゐて、それはおそらくアイヌが好んで用ふるマキリ(小刀)で行はれたと見る可く、その目的に就いてはアイヌ部落に於ける種々の風習から極端なる迷信に派生した巫術に必要な祕薬を屍體の各部、例へば腦髓、眼球等に求めたのであらうとしてゐる。次に犬飼教授はアイヌでは其の大型の板舟、丸木舟の他に、樹皮を以つて作つた木皮舟(ヤラチツツ)の使用された事を擧げた後、その種の舟をばアイヌの二人の經驗の多い故老に就いて探索して、製作、用途等を解説してゐる。それに依ると材料は普通はキハダ即ちシロロの皮で、エゾ松の皮は第二次的に使用された。而して製作は山中に於いて先づ木皮で大體の舟型を作り、然る後舟の骨組を作る。一艘は二人掛りで半日で作られ、これが狩獵時の即急な場合の一時的使用に堪え得ることを明かにした。鷹部教授は構造力學の上からアイヌの屋根を研究したものである。それにはアイヌは家屋を先づ屋根から先に造り、後これを幾人かの肩にかけて柱の上にのせた事、又上からの重量を引き受ける骨組三脚式の構造をもつたケツンニの存する事等が主として解説せられてゐる。高倉氏の論文は近世に於いて山丹交易の名で代表せられてゐる樺太を中心とした日滿交易は同じ地帯に於ける諸民族間の原始的交易の發達したものなる事を強調したものであり、上原教授のは明治政府で開拓に着手した當初から今日に到る迄の北海道の土地制度の變遷を統計的に考究してゐる。兒玉、伊

藤原氏のアイヌの文身研究は序説として禁止令が出る迄の経過を述べ、ついで起源、方法、施行の年齢及び時期、模様、地方相等を實際調査した資料から克明に擧げられて居り、うちに徳川時代の文獻に對する科學者としての利用が巧みになされてゐる點、附圖と併せて注意すべきものがある。犬飼、名取兩氏の論文亦アイヌの熊祭イオマンテに對してよりよき理解を試みたものであつて、最初にアイヌの狩獵信仰就中その守護神ハシナウカムイに對する信仰を先づ説話的に解説した後、狩獵して之を祀り送る動物の熊はこの地唯一の猛獸で強い體力と智慧を有したので、この熊にあやかりたい氣持ちがその神としての崇拝に轉じてゐた事に論じて近時忘れられゆくこの所謂熊祭の實際を民俗學上の見地から調査考究しようとしたもの次號に於いてそれが完結せられるであらう。樺太地圖製作史は「元祿御國繪圖」から年代的に天明五、六年の探檢の結果、松前藩作製圖、享和元年幕吏作製圖、サガリン島間富林藏の探檢、樺太島の確認、樺太地圖の完成、北蝦夷山川地理取調圖等に項を分つて、古地圖を添載し乍ら、探檢史的な考察を行つており、うち地理學者の一讀すべきものをもつてゐる。

(第一輯、昭和十四年三月刊、第二輯十月刊、總頁三二〇頁)

(藤岡謙二郎)

綜合古瓦研究(第二分冊)

佐伯啓造編

本書は佐伯氏の主宰する夢殿論誌第十九冊として、諸家の古瓦

に關する研究二十一篇をあつめ、巧に編輯せられた別刷附圖を添へた特輯號であつて、内容を三部門に分つて第一を鮮潟支の古瓦第二を本邦出土品、第三を特殊研究とし、別に石田茂作氏の概論を巻首に、故喜田貞吉博士の遺稿を巻尾に添へたものである。こゝに輯められた諸研究は、各篇必ずしも著者の態度を一にせぬが、いま便宜上其の前後の二編を取つて内容の一部を傳へることにする。

石田茂作氏の「本邦の古瓦に就いて」と題する概説は、僅々十數頁の間において飛鳥より江戸に至る各時代の瓦の特徴を述べられたものであるから、具體的な資料を擧げての考證はこゝには望むことが出来ないが、各時代の性格の把握に明快なものがある。即ち飛鳥時代の瓦は朝鮮式即ち六朝式であつて、それに百濟高麗の兩系統の瓦の並び行はれたことは恰も佛教において惡惡惠便等の高麗僧と惠聰勸勒等の百濟僧との兩系があつたに對するものであり、白鳳時代は初唐式といふべく、宇瓦の流行・瓦當文様の全體的修正・鬼面瓦の採用等に前代と異りたる風を見せ、次いで奈良時代は前二者を合せた折中式といふべく、更に文化の地方波及の時代としてそれ／＼の地方色濃きものを生じ、且つ移民の關係によつて新羅系高麗系瓦の地方に種子をおろすものもあつたと述べ、平安時代初期における瓦文様式の退化を寺院の山岳入りによつて解し、一轉して藤原時代における新手法興隆の背後に貴族の好尚を考へ、この時代に瓦が寺院宮殿以外に神社建築にも使用されたこと、大棟を飾る鸕尾の代りに獅子口なるものの考案された